



銀杏は手品師

東京大学名誉教授

(第15代所長・元第4部教授)

增子昇

私が所長職にあった1986年4月から1989年3月は、いわゆるバブル経済の成長期であり、六本木の敷地が平方米当たり1000万円と値踏みされた時期であった。1万円札でできた絨緞を12枚重ねて敷く事に相当する。

材料の分野では、87年2月に発見された「液体窒素温度で超伝導を示す酸化物」の研究が人気を集めていた。追いかけるように常温核融合という話題が89年3月に生まれ、二匹目のどじょうで、大きな騒ぎが起こった。産業界は新素材ブームに酔い、材料連合フォーラムの仕掛けた新素材展は年ごとに規模を大きくし、90年には会場を幕張メッセに移してなお手狭になるという状況であった。今から見ると戦後40年が過ぎて、歴史の大転換が起こる前の明るい慌ただしさの時代であった。

この時代の東大における懸案の一つであった駒場キャンパスの整備が、現在良い形で進行していることは大いに喜ばしい。教職員各位の真摯な努力に心からの敬意を表すると共に、新しい皮袋に、新しい酒が入れられ、生研がさらに大きく飛躍することを期待している。

現在われわれは、技術の生み出した数多くの人工物に支えられて生を享受しており、技術は今や第二の自然である。人間の生存に必要な道具から始まった技術は、エネルギーを獲得して生活の質を向上させる機械になり、情報を獲得して活動の領域を拡げるシステムになり、さらに進んで人間の生活をトータルに支える環境に進化した。われわれは現在技術をもって生きるのではなく、技術において生かされている。この20世紀の社会を背景にして次の世紀を駆動すべき科学のありようを考えると、恐らく“Industrial Science”と呼ぶべきものになると思う。

生研の誕生のときに、英語の名前として先輩が選んだ “Industrial Science” は、産業科学すなわち産業発展の基盤としての科学を意味し、これは疑いも無く日本の戦後の発展を支えた手品の仕掛けを提供した。技術がここまで進んだ後に来る社会では、現在われわれが、工学、自然科学、人文科学、社会科学などと区別して呼んでいる知的資産は、お互いに孤立しては存在の意味を失い、それらを融合再編した新しい知が必要となる。新しい時代を駆動する “Industrial Science” は、まさにその新しい知を組み立てる基盤としての基本のソフトウェアを意味する。広い意味での工学的教養 (techno-literacy) と言ふことでもある。

すなわち、技術が人間生存の為の環境となった事を前提として、あらゆる学術分野が、お互いに影響を及ぼし合いながら、知の組み替えを余儀なくされる。その組み替えの為に必要な頑丈で奥行きのある舞台を提供することを“Industrial Science”の名を持つ研究所に期待したい。

先般あるカラオケの席で、「公園の手品師」と言う古い歌を、誰かが歌った。「銀杏は手品師、老いたピエロ」と言う歌詞が出てきた所で、隣にいた某社取締役技術本部長殿が、「これ東大の事ね」とささやいた。歌が終わると彼女が「先生、あまり深く考えないでね」と言ってくれたが、「もう遅い、充分に考え過ぎました」と私。某社は鋼板の大ユーザーであり、大変に元気が良い。情報通に言わせると、今元気がいい企業は、技術本部長が銀杏印の法被を着ていない所らしい。

「東京大学第二工学部（今岡和彦著、講談社、1987）」と言う本には、戦後の経済成長の時期に、大手品を披露したわれわれの先輩達が、どのような環境から育ったのか記録されている。同じ工学系でも、二工の方が少し元気が良かったということのようである。

東大工学系の新制大学院教育は発足の時から、工学部、生研、理工研（当時）、の“equal footing”を基本理念として運営されてきた。工学部が大学院工学系研究科になった今でもこの考え方は守られているものと思う。工学部、先端センター共々、新しい手品の種と仕掛けを生み出すと共に、時代の要求する、さっそうとした手品師を養成して貰いたいものである。